

Alan Klima, *The Funeral Casino: Meditation, Massacre,
and Exchange with the Dead in Thailand*

Princeton University Press, 2002, 317pp, \$25.95 (pbk)

エリック・シッケタンツ

最近ロシアで起こった学校占拠事件の報道では、心を揺さぶるような死と破壊の映像が映し出された。また、激化するイラク戦争においては、米軍戦死者の棺の映像配信が禁止された。これらのことは、死に関わる映像が、人々に大きな衝撃を与え、また何らかの不思議な力を持つことを示していると言えよう。こうした死にかかわるイメージとそれが社会と人々に与える影響こそ、本書の大きなテーマの一つである。

著者 Alan Klima は若手文化人類学研究者で、現在は米国カリフォルニア州のデービス大学文化人類学科の助教授である。著者は本書でビクター・ターナー氏賞を受賞した(2003年)。フィールドワークのためタイに滞在中におきた政治的闘争と軍隊による虐殺、いわゆる「五月流血事件」が大きな刺激になり、Klimaの研究対象を決定させたのである。本書で著者はこの1992年の事件を土台にし、死を映す映像の分析を通じて、幅広く政治的権力や身体についての哲学的な論考を試みている。Klimaは、Michael Taussigなどの前衛的な研究者たちが開拓した方法論を引き継ぎつつ、従来の民族誌中心的な文化人類学に対する批判をさらに強めたと言えよう。

中心的な二つの論題は、生者と死者間のさまざまな関係、および政治的な新体制の誕生であるが、本書の研究対象は、現代タイにおける政治闘争に止まらず、仏教の死体を観想する修行、タイの北部の通夜におけるギャンブル行為という二つの現象へと移ってゆく。その意味で、本書は非直線的な構成を持つが、あえて直線的に要約したい。なお、本書の構成は以下の通りである。

第一章 Introduction

第一部

第二章 The New World Power

第三章 Revolting History

第四章 Bloodless Power

第五章 Repulsiveness of the Body Politic

第二部

第六章 The Charnel Ground

第七章 The Funeral Casino

序文において、著者は本書の基本的な狙いと思想的な立場を紹介する。意識的に「過激」な立場をとる著者は、研究者の役割は学界や社会の現状の徹底的な批判にこそあると主張する。また、批判とは社会における諸議論を刺激することであって、研究者の論点はいわゆる「実践的」また

は「現実的」でなくてもよいとする。ここでいう「過激」とは、主に学界でまだ市民権を得ていない前衛的な方法論を通して、学界の主流に刺激を与えるという意味における過激さのことであり、また同時に、政治的に過激であることをも意味する。批判するという行為は、著者が推進する「徹底的民主主義 (radical democracy)」の機能であるが、徹底的な民主主義の実現可能性の有無に関わらず、こうした立場から社会を批判することは、それ自体有意義であるとする。そして、徹底的な民主主義の推進者は、死者と社会の関係を見守り、死者に代わって死者に対する社会の義務を思い出させる役割を担っているとする。

国家は、国のために犠牲となった死者たちを、共同体のアイデンティティの源泉として記念する一方、彼らから国家の正当性を引き出す。この意味で、国家は死者と交換的な関係にある。しかし著者の指摘によれば、現代タイでは、軍部政権との衝突で命を失った人たちを記念することは、人々によって積極的に倫理的・政治的な要求と結びつけられているため、これらの死者たちを簡単に体制的国史観に吸収してしまうことはできない。遺族は死者の記憶を保つことにより、社会に対し、政治的な虐殺で亡くなった人々への義務を確認させる。虐殺の記念日は、年に一度巡ってくる循環的な出来事であり、国家の進歩史観から死者の記憶や死者に対する義務を取り戻す大きな意味を持っていると著者は述べる。

本書が取りあげる三つの現象—つまり政治的虐殺、仏教の死体観想と通夜でのギャンブル行為—の間の共通点は明確ではないが、これは大きな問題ではないと Klima は述べる。なぜならば、本書の狙いは従来の記述的な民族誌にあるのではなく、むしろヴァルター・ベンヤミンが提唱した「歴史哲学」に近い。ここでいう「歴史哲学」という概念は、歴史的データから哲学的洞察を得るという方法論をさしている。その最終的な狙いは、哲学的論考にあるから、歴史的なデータ間のつながりが薄くても構わないと Klima は主張する。ベンヤミンの「歴史哲学」を基にし、Klima は「民族誌哲学」(philosophical ethnography) を提唱する。つまり、民族誌を通じて哲学的洞察を得ようとするのである。

次いで著者は、現代の西欧文化人類学では、現地思想が社会学歴史学的に整理される一方、研究者が西欧思想を普遍的な解釈道具として利用しているという矛盾を指摘する。この矛盾に対して Klima は、現地思想は解釈の対象としてではなく、解釈の方法としても積極的に使用されるべきだと主張している。本書では、特に仏教の因縁思想や仏教的存在論が解釈方法として採用されている。

著者は異文化の再解釈のみならず、先行する文化人類学の基礎研究の再評価も行っている。特にマルセル・モースの「贈与論」を積極的に評価し、モースの発想を仏教の因縁思想と結び付けて論を進める。しかも、モースの研究を異文化の記述的研究としてのみならず、理論的な洞察とも見なし、「贈与論」に描かれた交換論を方法として用いる。後にわかるように「贈与論」に登場する贈り物に伴う義務という概念は、Klima にとって大きな意味を持っている。

他者性認識は、文化人類学において多くの場合にたてまえにすぎないと著者は主張する。例えば、多くの研究者にとって、仏教哲学がデリダと同じ思想的空間に平等に並置されるということは、認めがたいことである。西欧の学会には、こうした異文化を本質的に異なる空間として把握する傾向があるが、著者は、諸文化は独立して存在しているのではなく、同じ世界史の地平に展開していると主張する。また、仏教思想は西欧思想と同じ歴史的空間に存在しているので、仏教

思想を西欧思想と平行に方法論として扱うことも可能であるとも Klima は主張する。即ち、他者の思想を普遍的な方法論として使用できるとするのである。

本書の第一部は、タイの現代史における軍部による幾つかのクーデターと、それに対して行われた民衆運動を扱う。Klima は三つの事例を取り上げる。1973 年の事件、1976 年の事件、そして著者自身が経験した 1992 年 5 月の事件である。理論的なレベルでは、権力、公共イメージ (public image) と映像の関係が論じられる。

議論は、1991 年 10 月に当時のクーデターによって成立したスチンダ將軍軍部政権下のバンコクで行われた、世界銀行と国際通貨基金 (IMF) の会議の分析で始まる。スチンダ將軍は同年 2 月のクーデターで軍部政権を成立させたのち、会議上で自国への経済的援助を求めていた。著者の関心を引くのは、ここで行われた国家のイメージ制作の政治性 (つまり公共イメージの操作) である。現実とイメージの関係は複雑で、イメージには現実に影響を与える力までであると著者は論じる。現代タイにおいて、イメージはすでに単なるプロパガンダ的な道具ではなくっており、現実に具体的な影響を及ぼすことを通して、イメージ操作が現実を創る機能を持ったことを軍部政権の政策から見出している。

有力なイメージを創れば、現実もそれに従って変化するという考えに基づき、軍部政権はタイの国際的イメージを損なう事実をすべて事前に消しておく計画をたてた。健全な公共イメージと経済発展の間には密接な関係が存在しているため、安定した国家のイメージを創れば、海外の投資も得られ、それによって実際に国家の安定が得られるという目論見であった。即ち、社会問題を不可視的にすることで、世界銀行や国際通貨基金の代表者たちを安心させて支援を得、経済に具体的な影響を与えることができるという考えに基づいた政策であった。

しかし、クーデターにより成立した軍部政権は、冷戦後の世界において、あまり良いイメージを持たれない。スチンダ將軍は、軍部政権の影を消し去る作戦を取った。10 月 14 日は、1973 年に起きた政治的な虐殺事件の記念日であるが、政権はその記念式の開催までも阻止しようとしたのである。イメージ操作の都合上、軍部政権は自分の出自を否定し、同時に民主主義の行動家をタイの公共イメージの敵と見なさざるを得なかったことが著者によって指摘されている。

次いで 1973 年と 1976 年の民主主義運動が取り上げられる。ここで Klima は、イメージの完全な制御の不可能性を主張している。一度作りあげられたイメージは、制作者によっても完全には制御され得ない。そして、イメージ制御の観点から見れば、もっとも制御が困難なのは死にかかわるイメージである。「死」についての映像が与える衝撃は、どのような個人に対してもあまりにも大きく、個人がその映像から何を受けとるかを完全に操作することは難しいのである。

1973 年に軍部のクーデターが起きた後、立憲政権の再成立を求める学生と市民が抗議集会を行い、軍部政権の反撃が起り、流血事件へと発展した。残された運動家たちは、殺害された仲間たちの死体を担ぎあげ、軍部政権の非道を訴えるべく街中を練り歩いた。死体の提示が多くの市民を動員し、最終的に軍部政権はこの民衆蜂起によって崩壊した。Klima によれば、これはタイ政治における「公共なる死体」 (public cadaver) の誕生であり、その後の政治闘争では死にかかわるイメージが常に動員されることとなった。著者は、死にかかわるイメージの力の働き方は、基本的に予測できないものであると述べている。殺害された運動家たちの死体と虐殺から受けた衝撃が市民を動員し、軍部政権の敗北を可能にしたため、新しい政治的体制は、死者と贈与的な

関係に入った。死体とその映像は、一時的に公共空間から姿を消すものの、完全に消え去ることはなく、いつかはまた現れて、新しい政治的政権によって美化された新体制の公共イメージへ疑問を投げかける。

死にかかわるイメージが持つ力の制御が不可能であるもう一つの事例は、1976年の民衆運動の敗北に見られる。1973年には民衆運動が勝利したが、1976年に再び学生運動と軍部政権の衝突が生じた。このとき、二人の学生運動のメンバーが警察に殺害され、学生たちはその死体の映像をプロパガンダとして利用したが、右翼はその映像の意味を逆転させた。マスコミを通し、絶対不可侵の存在である王室への不敬という解釈を普及させたのである。死体の映像が持つ力が学生たちに対して行使され、数多くの運動家が殺された。

1992年5月の出来事は、著者自身の経験として語られる。抵抗運動は非暴力的に行われたが、軍部政権との対立が深刻化したため、虐殺が発生した。その後、虐殺の様子を映した映像が、街頭のブラック・マーケットで売りに出された。こうして起きた死にかかわる映像の流出は、軍部政権に対して大きなプレッシャーをかけた。タイ国内のみならず、虐殺と暴力のイメージが世界中でも放送されたことにより、タイの公共イメージが危険にさらされ、株式市場は大きな経済的打撃を受けた。最終的には、国王が介入し、再選挙の執行が公布されたことにより、事態は収拾を見たのである。

Klimaによれば、多くの西欧の思想家は、映像に対して深い不信感を抱いている。彼らの批判によれば、死を映す映像は、他人の死や苦しみに対する人間の感受性を鈍化させる効果を持ち、人々はそのような映像を見ることで自己満足を得、自己の存在を肯定しているにすぎない。これは結果として、マスコミとイメージのヘゲモニーを支援するとされる。しかし、こうした見方に対し、Klimaは反論を加えている。筆者は、イメージ、特に死にかかわる映像の反体制的な解釈の可能性を指摘する。死にかかわる映像を、それを見る人の自己満足という観点からのみ把握しようとするのは単純にすぎ、死にかかわる映像にも不気味さ、政治的洞察、宗教的意義があると著者は主張する。そして、この不気味さが体制に疑問を投げかけうるとするのである。このようにして著者は、現代のグローバル化したメディアに関する批判的な見方の根本的な再考察の必要性をさえ唱える。

イメージの反体制的な機能を明らかにするために、議論は第二部で仏教の死体観想に展開していく。著者はある中部タイの寺院に滞在し、「不浄観」(asubha kammattana)という死体観想に参加した。一般人にとって死体は恐れるべきものである。しかし、仏教の死体観想では、死体とは単に恐怖すべきものばかりではなく、洞察の源泉にもなりえる。死体観想を通し、仏教者は自身の身体を分析し、自我についての洞察を得るのである。いわゆる「不浄相」(瞑想中に浮かんでくる不浄なるものにかかわるイメージ)を修めることにより、自我を統一された存在ではなく集合的に構成されているものとして理解するのである。この修行では、実際の死体と死体の映像などが観想の道具として使用されている。不浄観の目的は、時間的な連続性を持つ自我という観念を消すことである。それは不浄観こそが、存在を五蘊と呼ばれる物質的・精神的な五つの構成要素に解体することにより、修行者に存在の仮設性を自覚させるからである。著者は、死体観想にこそ、死にかかわるイメージが持つ力の鍵があると主張する。

近年では多くの研究者が、イメージ中心の世界の欠点を主張する。映像などのイメージからは、映っているもののリアリティが完全には伝わらず、現実と非現実との区別が曖昧になるため、見る人を惑わせる危険性があるというのである。こうした観点に対して、Klimaは、仏教の存在論を手がかりに、西欧の研究者が持っている「総体的な存在」としての人間という前提自体が間違っているのではないかという問いを立てる。

存在の総体的な理解を主張する学者の一人がメルロ＝ポンティである。メルロ＝ポンティの思想では、総体的な存在が重要な立場を占めているが故に、視覚中心のイメージは批判的に見られている。しかし、仏教の観点から見れば、総体的な存在のリアリティこそが問題である。死体観想の目的は西欧研究者たちがいう総体的な自己理解を超えるのである。続いて、著者はヴァルター・ベンヤミンを引きながら、仏教的な観点の価値を論じている。現代世界が視覚イメージ中心の世界であることは既存の事実であり、単にそれを批判し、映像を幻覚と捉えたところで、その行為に現実を変える力がないならば、それは無意味な行為であると筆者は指摘する。そして筆者は、イメージの再評価の可能性を、最初から総合的な存在という概念を否定している仏教的観点に求める。不浄観において、写真などのイメージを瞑想の道具として使用することに問題はないとされる点は、こうした観点から理解されるべきである。総合的な存在という観念が空想にすぎないならば、イメージから完全なリアリティが伝わってくるはずはないのである。そして、同様にベンヤミンは、イメージを完全に否定的に捉えず、むしろ複製的なイメージが持つ明らかな人為性における潜在的な力を評価しているのである。映像などのイメージには、総体的な存在感が欠けており、その欠落こそが物事的人為性を痛感させるところにイメージの反体制的な意義がある。それは社会構造と権力関係の人為性までも露呈するからである。死にかかわる映像には、人にショックを与えることを通し、体制の人為性を告発する機能があるとKlimaは評価している。Klimaは権力者が利用するイメージのヘゲモニー的な力を認めつつも、イメージには本質的にヘゲモニーを支える機能がないというのである。幻覚的な現実を作るイメージには、現実を不明瞭化する危険も十分ある一方で、ヘゲモニーの人為性を剥き出しにする力もある。これが著者によるイメージの再評価である。

最終章で取り上げられるのは、タイの北部における通夜カジノである。通夜カジノとは即ち、通夜で博打が行われることであるが、これは大勢の客を集め、故人を慰めるために有効な方法である。遺族が食べ物や飲み物を用意する通夜は生者への贈り物として行われる。著者によれば、通夜はマルセル・モースが論じた贈与の一例で、生者と死者の間の交換的な行為である。つまり、通夜とは死者に代わって遺族が生者の共同体のために行う儀式であると同時に、死者自身のために行われる儀式でもある。しかし、デリダによれば、純粋な意味での「贈与」という行為は不可能である。なぜならば、贈与という行為は贈られた側に恩の義務を発生させるからである。贈り物をする際には、贈る側は最初から恩返しを期待しているため、贈与という行為は贈る側の利己的な行為でもある。デリダによれば、贈与という行為はどうしても市場的な人間関係を形成するが、タイの通夜にもそれは当てはまる。追善の論理では、自分が集めた功德を死者に伝えることでさらに功德を得ることができる。

しかし、この意見に対して著者は反論し、仏教の因縁思想の観点からモースの贈与論を再評価する。仏教思想では、自分の行為が具体的にどのような反応を呼び起こすかということは不可知的

なことである。因縁の教えは信者の行為に対する認識を高めるためのものであり、因果律ですべてのことがお互いにつながっているため、交換的な関係にある。ある行為がすべてのことに影響を与えうる。つまり、すべてのことが最終的に贈与的な関係にある。そして、どの行為も世界への贈り物として考えるべきだと著者は主張している。タイの通夜カジノもこの文脈で理解されるべきで、Klimaによると、一番大きな贈り物は人間社会そのものであり、因果律の下で人々は社会を改良していく義務を持っているのである。仏教的因果的な世界観の価値は、すべてのものの関係を絶え間なく批判的に再定義させることにある。このような考察の後、著者は最後に1992年の事件の話に立ち戻る。流血事件で命を失った人々の行為が、私たち皆に義務を与えた。民主主義のために亡くなった人々の贈り物をけっして忘れてはならない、と著者は読者に呼びかける。

本書はタイや東南アジアの地域研究者という狭い読者のグループにとつてのみならず、広く人文社会系の学問全般にとつて有意義な著作だと評者は考えている。本書で語られている出来事は、ほとんど著者自身の経験に基付いており、その意味で本書は個人的な経験に基づく作品となっている。「五月流血事件」、仏教の死体観想や通夜のカジノの記述はとても鮮明である。その文体は学問的というよりも、むしろ旅行記のスタイルに近く、民族誌的な部分は非常に分かりやすい文体、理論の部分はポスト・モダン的で難解な文体となっている。また、著者の発想と方法論は新鮮である。特に仏教思想を通して、デリダなどの思想家を批判し、マルセル・モースの「贈与論」を再評価するのは興味深い。イメージというものを再評価している点も興味深く、示唆に富むものである。

しかしながら、著者が自ら認めているように、虐殺、死体観想、通夜カジノの共通点あまり明確化されていないため、内容的にも飛躍した印象を与えるところが多少ある。むしろこの著書は三つの独立した内容の論文集として見た方がよいかもしい。また、それぞれの現象の民族誌的なデータの少なさや、タイ人からの視点の欠如も問題点として挙げられる。特に、タイ人の死体映像に対する見方や、タイ社会での生者と死者との関わり方のもっと詳しい説明があれば、著者の論理的な主張は、より具体化されたと思われる。現行のスタイルでは、やや民族誌的記述と理論的記述の間にギャップが感じられる。本書で著者は意識的に主観的な語り方をしているが、その点でどの議論も最終的に著者の発想や世界観を反映しているにすぎないと言える。本書の大部分は、著者自身の個人的な洞察と意見を表しているもので、読者として著者の発想には刺激を受けても、本書をどう評価すればいいかという問題は難しい。著者の目的は地域研究より、政治哲学と政治倫理という分野にあるとも思われる。従って、本書は研究書というよりむしろ政治的なマニフェストと呼ぶべきだろう。著者の執筆の目的は、死体の力（つまり虐殺の描写）を利用し、読者の内部に死者に対する義務感呼び起こすことにあると思われる。即ち、死者との交換という概念を通して、読者の中に政治的な行動、社会に対する積極的な働きの必要性を認識させようという試みなのである。複雑な性格を持つ著書ではあるが、個人と社会の関係やイメージの再考察を促すものであるという点において、本書を読むことは価値のある経験だと言えよう。